山口県立

総合医療センターだより

2019.2
vol.35

Contents

■地方独立行政法人山口県立病院機構
理事長　就任のごあいさつ
■当院職員が山口県選奨を受賞しました
■部署だより（栄養管理部）
ママと赤ちゃんを想ったお祝い膳を目指して
■特集
外来治療室の体制と多職種連携
■看護部通信
広島豪雨災害の派遣をとおして
■地域医療連携ニュース
心不全地域連携パスの運用を開始しました
■院長だより
■インフォメーション
やまぐち医療最前線の放送予定、
きららサロン・ミニ講座のご案内、
緩和ケア集合研修会を開催しました、編集後記
■外来診察担当医表（別紙）

就任のごあいさつ

地方独立行政法人山口県立病院機構
理事長　岡　紳爾

2018年4月から地方独立行政法人山口県立病院機構の理事長として赴任いたしました岡です。

昨年3月までは、山口県庁健康福祉部において26年間にわたり保健医療行政に携わっており、各医療機関の方々には大変お世話になりました。改めてお礼を申し上げたいと思います。

私は、1983年に山口大学を卒業し、当時の第一内科に入局。大学院修了後は、徳山中央病院、山口大学医学部附属病院や小倉記念病院で消化器内科に従事しておりました。久しぶりに医療の現場に戻ってみると、私が診療をしていたころに比べ、医療をめぐる環境の激変ぶりに改めて驚いております。医療制度改革に伴って、特に、病院運営の厳しさを痛感しているところです。

県立病院機構は2つの県立病院の運営を管理する立場にありますが、そのなかでも「県立総合医療センター」は県の高度急性期医療を担う中核病院の一つとして重要な位置を占めております。

前理事長であり院長でもあった前川先生のこれまでの取組を生かしつつ、「県立の病院として推進すべき医療」、「地域で担うべき医療」、そして「経営」と、3つのバランスを取りながら、武藤院長とともに病院をさらに発展させ、**まずは特定の分野であっても、県内ナンバーワンといわれる病院をめざしていきたい**と思います。

そうした中で、各医療機関との連携、いわゆる「顔の見える関係」づくりは大変重要と考えておりますので、今後ともより一層ご支援ご協力を賜りますようよろしくお願いいたします。

当院職員が山口県選奨を受賞しました

このたび、医療衛生事業において長年尽力した功績が認められ、中央放射線部伊藤弘副技師長が山口県選奨を受賞しました。

山口県選奨とは、山口県の住民の福祉の増進に関し、顕著な功績があった者または団体に対し、山口県選奨規則に基づき、選奨されるものです。

伊藤副技師長のコメント
「保健衛生環境功労を受賞しました。さらに地域医療に貢献できるよう励んでいく所存です。」

部署だより

ママと赤ちゃんを想った お祝い膳を目指して

栄養管理部　吉岡 理沙

2018年10月1日から「お祝い膳」を一新しました。きっかけは「当院のお祝い膳をもっと喜ばれるものにできないか」という産科医師からの提案でした。

『デザート付きフレンチコース料理』
『赤飯に刺身や鯛の尾頭付きの和食』
『車海老やステーキなどの豪華な食材を使った料理』
『産後の体に優しい料理』

どれが当院の目指すお祝い膳なのか。さまざまな案を検討するため数社からの提案をいただき、院長をはじめとする医師・看護師・助産師・管理栄養士・遺伝カウンセラーや事務部で試食会を行いました。

試食会の結果、豪華な食事より、産後の体力回復や母乳のために「安全で安心な食材を使用し、産後でも食べやすい量で多品目、目でも楽しめる食事」が当院の目指す「喜ばれるお祝い膳」だと考えました。

防府市内に、『家族の幸せと健康を願ってご飯を作る』ことをコンセプトとし、出汁にはいりこ、昆布、鰹節を挽き、旬や地元の食材、調味料、器にまでにこだわりを持つカフェがあります。この度、このカフェのオーナーと私達の想いが重なり、「ママに喜んでもらえるなら」と当院の想いを詰めたお祝い膳を作っていただけることになりました。

取組を始めてまだ数か月ですが、食事をされたママからは「素敵な時間をありがとうございます」「妊娠中は我慢をしていたのでとても嬉しかったです」などのメッセージをいただいています。

産まれてくる赤ちゃんのことを想い、食べる量や食材に常に気を遣っていたママに、喜んでいただけると幸いです。

外来治療室の体制と多職種連携

外来化学療法を安全に行う体制づくり

外科部長（外来化学療法運営委員会委員長）須藤 隆一郎

近年、副作用の軽減を図った新規抗がん剤、分子標的薬、免疫チェックポイント阻害薬の開発や、制吐薬、G-CSF製剤など支持療法の進歩、さらに医療経済的な理由により、がん化学療法は入院から外来治療へと大きくシフトしています。

当院ではすでに、2009年から中央処置室に併設した12床の化学療法室で外来化学療法を行ってきましたが、環境改善と外来でのがん化学療法の増加に対応するために、2013年から15床に増床し外来治療室として独立させ、現在の場所に移転いたしました。

外来治療室では、がん薬物療法認定薬剤師１名、がん化学療法看護認定看護師１名を含む看護師４名が常駐し、主治医と連携し、治療を行っています。

2017年度の治療件数は１日平均24.7件、年間6,001件で、年々増加の一途をたどっています。このように増加する化学療法を安全に行うために、抗がん剤治療レジメンは支持療法も含めすべて、薬剤部により事前登録制としています。これにより投与量の間違いを無くし、登録されていないレジメンは処方できないシステムとなっています。さらに内服の抗がん剤やホルモン剤に関しても、外来治療室の薬剤師が一括して患者さんに説明を行い、内服スケジュールや投与量を確認するシステムをとっており、全ての外来化学療法を安全に実施できる体制を整えています。

患者さんを多角的に支援する医療チーム

がん化学療法看護認定看護師　村田 佳子

外来治療室には毎日多くの患者さんが来室されます。私たちは患者さん一人ひとりの化学療法を安全に確実に実施し、また、それによって生じる吐き気やだるさ、しびれや脱毛などの副作用を、患者さんとともに予防し対処することを基本的な目標として、医師を中心に看護師・薬剤師が連携して取り組んでいます。

外来で化学療法を受ける患者さんは、痛みやリンパ浮腫、病気に対する不安、仕事と治療の両立に関する悩み、家族や子どもとの関わり方に関する悩みなど、様々な不安や悩みを抱えています。これらの事柄にも対応しようと外来治療室のベッドサイドでは、院内の専門・認定看護師、臨床心理士、認定がん専門相談員、MSW、管理栄養士などもケアにあたり、患者さんやそのご家族の状況を医療チーム全員で共有しています。

外来治療室では、医療チームのリーダーである医師を中心に多くの職種が連携し、化学療法中の患者さんやご家族が抱える苦痛や不安が少しでも軽減でき、治療に臨めるように支援していきたいと考えています。

看護部通信

広島豪雨災害の派遣をとおして

災害支援ナース
5階南病棟　上田 恵子

2018年8月20日から23日まで広島県呉市の避難所で、災害支援ナースとして災害支援活動を行いました。災害支援ナースには被災者が健康レベルを維持できるように、生命と暮らしを守るための支援を実施する役割があり、私が派遣されたのは、豪雨災害発生から1か月が経過した時期でした。

派遣された避難所の生活環境は確立されていましたが、被災者の心身のストレスが強く感じられました。そのため、被災状況や今後の生活再建に対する不安を傾聴し、精神的ケアに重点をおき、活動しました。こころのケアチームとも情報共有し、苦痛緩和に繋がる専門的支援を実施していきました。災害支援ナースに求められるのは高い看護の倫理観であり、看護の本質を心に刻みながら活動した4日間でした。

9月に行われた県内派遣者の意見交換会では、派遣前の必要な情報と伝達方法の検討や、緊急時の災害支援ナースと行政間の調整方法が今後の課題として挙げられました。

近年、各地で災害が頻回に発生しています。刻々と変化する被災状況から正確な情報収集を行い、被災地のニーズに合わせた支援活動が行えるように、これからも日々準備をしておきたいと考えています。

〈避難所に寄せられた応援メッセージ〉

地域医療連携ニュース

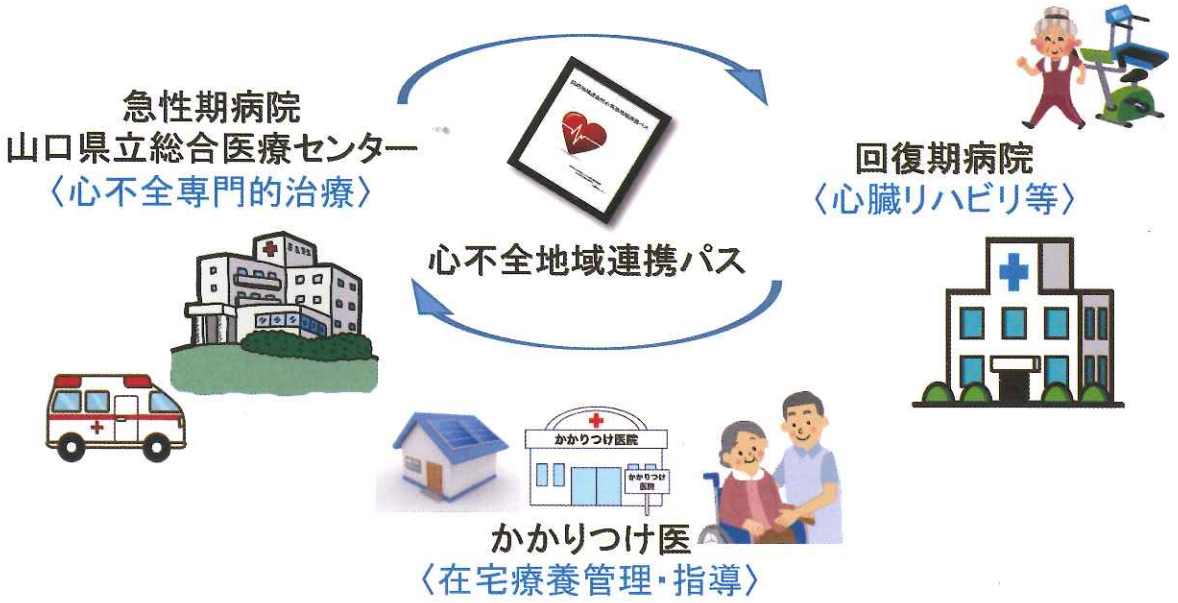
2019年1月から心不全地域連携パスの運用を開始しました

近年、心不全患者は増加傾向にあり、今後は更に新規発症や再発を繰り返す患者さんの増加が予想されています。高齢者は、加齢に伴い徐々に心臓の機能が衰え、一度心不全を発症すると再発を繰り返すことが少なくありません。

当院では心不全地域連携パスを運用し、急性期病院としての専門治療を行った後は、連携医療機関と継続した治療やリハビリに関連した情報の共有を行い、患者さんが早期に住み慣れた地域に戻れるように支援させていただきます。

今後も、地域の皆様のお役に立てる県立総合医療センターとしてあり続けるためにも、スタッフ一同より一層努力してまいります。

心不全地域連携パスの流れ



院長だより

人類と感染症との戦い

家畜伝染病である豚コレラの感染を受けたイノシシが50頭もいるとの新聞記事(霜月)を読む。日本への渡り鳥の飛来がはじまり、H7N9などの高病原性の新型鳥インフルエンザウイルスの探索も本格化。

2019年、元号は平成から何に改められるのか、わくわくする。

鹿児島では菜の花が開花し、春もそこまで近づいてきた。さあ、気持ちを引き締めて当院の感染症対策に万全を期すように努めよう。

武藤　正彦

インフォメーション

○やまぐち医療最前線(tysテレビ山口)

放送日時	放送内容	出　演
3月 2日(土) 18:55～19:00	「各科連携で臨む胃がん治療」	外科 須藤 隆一郎　医師
3月 6日(水) 16:50～16:55		

○きららサロン

対　象：がん患者さん・ご家族
場　所：当院外来棟２階 会議室前コーナー
日　時：毎週火・金曜日 10：30～15：00

○きららサロンミニ講座

がんと向き合う日々のためのミニ講座
「食事を楽しむ」
日 時：３月12日(火) 13：00～13：30
講 師：栄養管理部管理栄養士　吉岡 理沙
場 所：当院外来棟２階 会議室前コーナー

○緩和ケア集合研修会を開催しました

当院では2007年から厚生労働省の指針に沿い緩和ケア研修会を毎年開催しています。2017年12月に緩和ケア研修会の開催指針が見直され、新指針に沿った緩和ケア研修会を2018年11月18日(日)に開催しました。

緩和ケア＝「がん」と認識しがちですが、本来は様々な病気を持っている患者さんが、終末期をどのように過ごしたいかを尊重し、患者さんに寄り添った医療の提供を、医師だけではなく多職種のスタッフで構成されたチームで行うことを目標に研修が進められました。

当日は、医師20名と看護師・薬剤師・管理栄養士・作業療法士・ソーシャルワーカーのスタッフ11名を合わせた31名が参加しました。これだけの多職種がロールプレイやグループワークを行うと、職種ごとに異なる意見が活発に飛び交いました。

今後の医療現場で重要な役割をもつ「緩和ケア」は、ニーズもますます多くなると予想されるため、このような研修会を途切れなく行っていく大切さを感じました。

グループワークの様子

【基本理念】
県民の健康と生命を守るために
満足度の高い医療を提供する

○編集後記

もう20年以上前になりますが、小学校の全校集会の時に先生が話をされた「1月は行く、2月は逃げる、3月は去る」という言葉が強く印象に残っています。

年も変わり、もうすでに1か月が過ぎようとしています。今年度も残りわずかですが、これまでの仕事を振り返り、来年度はさらに良い広報活動が行えるよう、取り組んでまいりたいと思います。

（企画調整室　H.A）

地方独立行政法人　山口県立病院機構　山口県立総合医療センター
〒747-8511　山口県防府市大字大崎10077番地
TEL 0835-22-4411(代表)　FAX 0835-38-2210　URL https://www.ymghp.jp/
Yamaguchi Prefectural Grand Medical Center